



● NPO法人ホップ
障害者地域生活支援センター

代表理事 竹田 保

昨年は、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックに振り回され続けたが、年が明けてからも未だに終わりが見えない。コロナ禍の中では様々な課題が表出し普通に暮らすことの難しくなってきた人も多いと思う。

新型コロナによるクラスターが病院、福祉施設でも散発的に発生し、大規模クラスターが伝えられる度に、重度障がい者の家族は介護や治療確保の不安に悩まされている。昨年からの急激な感染拡大を受けて命の選別まで示唆され、命の価値が問われるようになってきている。命の価値が軽く扱われるようで憤りを感じる。

昨年、ブラック・ライヴズ・マター（BLM）という、言葉を多く聞くようになった。テニスの大坂ナオミ選手が賛同したこともあり、日本のマスコミでも度々報道されていた。

自分の中では、公民権運動、キング牧師の事件も歴史として記憶されている。強いて言えば、1963年のワシントン大行進の最後に行われたキング牧師の「私には夢がある」（I Have a Dream）という演説がDPI（Disabled Peoples' International）に引用されることがあるという程度の知識しかなかった。

BLM、DPIに大きな影響を与えた、キング牧師の演説にあらためて目を通してみた。

1862年のリンカーン大統領の奴隷解放宣言から100年を経ても、未だに人種隔離の手かせと人種差別の足かせによって縛り付けられ、物質的な繁栄という広大な海原の真ただ中に浮かぶ貧困という孤島に暮らしている。社会の片隅でみじめに暮らし、自分たちの国なのに国外追放者かの如く感じてしまう。そこで我々が今日ここに集結したのは、この悲惨な状況を浮き彫りにするためである。とスピーチは始まる。

絶望の谷間でもがくのはやめよう。友よ、今日私は皆さんに言いたい。我々は今日も明日も困難に直面しているが、それでも私には夢があ

る。それはアメリカンドリームに深く根ざした夢である。

私には夢がある。いつの日か、この国が立ち上がり、「すべての人間は生まれながらにして平等であることを、自明の真理と信じる」というこの国の信条を真の意味で実現させるという夢が。

キング牧師が亡くなって50年経ても、誰もが普通に生きる社会が実現しているとは言えない。それどころか、コロナ禍では不寛容が拡大し、自助・共助、集団への同調圧力が強まっている。暮らしにくさを感じる今だからこそ夢を叶える時なのかも知れない。

40年前に、道南での生活に限界を感じて道央の障がい者施設へ入所した。施設では働く技術を学び、食事を提供され、必要な介護も提供され壁の中では不自由なく生きていたが、息苦しさを感じ退所した。地域生活は想定外の連続というよりは、無知への酬いというべきなのかもしれないが、食事、トイレ、入浴はもちろん生活のすべて、生きていくためのすべてのサービスが提供されることはなかった。それでも、不自由を選択したのは自分だという思いに支えられていた。

その後も様々な失敗を繰り返したが、出会いと支えによって今日まで生きてきた。同じように、不安に怯え、不平等に怒る時こそ誰もが普通に暮らせる地域を目指し進んで行きたいと思う。いつか安息と平穏が必ず、訪れると信じた。

今年、成人を迎えるあなたや障がいを持つあなたは、コロナ禍の拡大が進む日々でも夢を語り、叶える努力を続けて欲しいと思う。いつの日か、「谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。主の栄光がこうして現れるのを／肉なる者は共に見る。」という日が実現する。

2021年、キング牧師のスピーチとともにすべての人の夢が叶うことを願う。